作庭実習「森をつくる」15
藤森学舎の樹木について

岩村伸一[1)]・和田香世[1)]

Seminar in Garden Design “Creating a Forest”15:
Woods on Fujinomori Campus

Shinichi IWAMURA and Kayo WADA

抄　録：京都教育大学美術科で開講されている『作庭実習』は、作庭を通して森をつくるということをテーマにしています。参加者は、体を使って空間を変えることに取り組みます。今回は、藤森学舎での作庭の様子を報告するとともに、「京都教育大学植栽計画」策定の現状について触れています。

キーワード：庭、森、手入れ、植栽計画

赴任した頃のこと、時間があれば木を見上げて歩き、なんと見事な樹木があるのだろうとわくわくしました。クスノキ、ケヤキ、カシ、エノキどれも本来その木が自然の下で獲得する形に枝を広げています。普通の街並みを相手にしてきた植木屋の眼には、有望な素材の数々に、うれしくなってしまう眺めでありました。

それから 10 数年がたち、木々もまたひとまわり生長しました。わたしはいつの間にかこの環境に深く関わることになっています。この大学構内のどこでもいいのですが、まわりの木々を見まわしてください。どう感じられるでしょうか。わたしは「なんとか、ひとつの森としてまとまりのある風景になりつつあるな。」と思っています。

多くの樹木が繁茂し、自然を感じさせる緑濃い環境となっています。しかし、自然のみでこの森が成り立ったわけではありません。これらの木々は、大木には旧陸軍時代からのものもあるでしょうが、ほとんどは大学の移転期・学舎新設期を通して、農業や生物学分野の教員のひとかたならぬ努力で続けられてきた植樹の結果であります。とりわけキャンパスの近隣にあった林業試験場から、多くの樹木の提供を受けることができたこともその理由であったと言われています。また、それらの苗が今の姿にまで生長したのは、この大学に属した多くのひとがそこに注いだまなざしを受けてであり、現在の木々の姿にはそうしたひとたちの想いが重なっているということを思わずにはいられません。わたしたちは、すばらしい緑を受け継いでいるのです。[1)]

これは、2012 年 3 月発行の広報誌 KYOKYO129 号に掲載された文章の前半部分です。ここに記してある思いに、おおむね今も変わりはありません。しかし、それにしても、「ひとつの森と

1）京都教育大学

してまとまりのある風景になりつつある」とは微妙な言い回しをしているものだと思います。「ひとつのまとまりのある風景」というのは、作庭における庭の手入れの要点、庭全体をひとつの景色―景観にまとめ上げることから来ています。樹木の剪定においては、枝先の透かしがうまくいったと思っても、木全体から判断しなくては適切な手入れであるかどうかはわかりません。また、庭の現場においても、或る植木職人による一本の樹木の剪定がうまくいったとしても、庭全体をまとめる視点から見たとき、それが有効であるかどうかはまた別の判断になるということがあります。作庭家はつねに庭全体を、場合によっては庭の敷地以外の例えば借景としての周辺の姿などをも含めた全体を見通すちからを持ち、そこに何らかの調和を導かなければなりません。そのうえで、まとめるということが可能になるのです。しかも、そのまえに「森として」を加えてあります。苦しい追加のように思えます。「森をつくる」と言ってきたからには、このとき、「ひとつの森になりつつある」と言いたかったに違いないのです。しかしわたしは、作庭家の立場から、周辺にひろがっていた緑を庭であると考えています。そのときのわたしの心境は、すでにあるかなり荒れた庭にはじめて手入れに入った植木屋を想像するとわかりやすいかもしれません。（引用した文章の後段、この庭の材料・下地となっている樹木の導入期については、「作庭実習「森をつくる」10 環境共生園について（4）」[2)] で詳しく述べています。参照してください。）さきほど微妙と言ったのはこのわたしの立ち位置をさしています。おそらく、「いつの間にかこの環境に深く関わることになっている」というのもそのことを示しているようです。今回の報告では、まず、この藤森地区の植栽に、わたしがどう関わっているのかを記しておこうと思います。実際には「作庭実習」「作庭研究」というふたつの設定を通じて複数名で作業することになりますから、正確に言うと、どういう感じ方や考え方を持ってこの場の木々に関係しているのかと言うべきかも知れません。ともかく、なるべく具体的に報告しようと思います。

ひとつめは、「作庭実習」（現在、後期木曜 3･4 限開講）という枠での、授業内容としての取組です。ここ数年、この授業のはじまりは藤森学舎の緑を教材として基礎的な事項を学び、体が作業することに慣れてから第二学舎の環境共生園での造園作業を主要な内容としてきました。共生園での造園が一段落をむかえた今、もう一度大学全体の木々を対象として捉え直す時期にさしかかっています。

毎年はじめに着手するのが、大学会館西側にあるウバメガシの生垣です。庭仕事での植物への手入れ―剪定には「刈り込み」と「透かし」のふたつの方法があるのですが、ここでは、作庭技術としてより重要な「透かし」の基本について、直接この生垣に手を加えていきながら学びます。当然のことですが、透かしは庭に携わる者にとって奥の深い大切な技術です。その習得を目指そうというのではありません。受講生の多くは、真新しい地下足袋と作業服を身につけ、はじめての植木バサミや剪定ノコギリを手におっかなびっくりで脚立に登っています。木を切るということはどういうことなのかを知ってもらうことがここでの目的です。この際、ウバメガシの堅さは最適の教材です。心地よい手応えが体に伝わります。はじめての者でも意外に熱中してしまいます。こうやって物事を「知る」ということを学生はあまり経験していないように思います。しかも、この本当に下手な素人の作業でも、ウバメガシの生垣は粘り強く支えてくれるのです。

次は、図書館玄関前のロータリーの植え込みとその周辺にあるヒラドツツジです。これらも刈り込みではなく透かしで対応します。ここでは、とにかくやりきることを目指しています。作業

前とその後の変化の大きさを知ってもらい感じてもらうことが目的です。

さてその次は、図書館の北側にある庭の手入れです。このあたりから少し庭仕事らしくなります。この場所は、少し古い話になりますが、2001 年度に当時の環境整備等委員会と会計課の依頼を受けて「作庭実習」の授業内容として、庭としての整備を行ったところです。整備の詳細については「作庭実習「森をつくる」2 庭と時間」[3] で読むことができます。その報告の末尾で「このままこの庭を放置したいと思っています。」と書いたことを憶えています。「時間、とくにそこで展開する自然の力が必須なのです。だから、許される限り放っておきたい。そのうち木々が育ち、持ち込んだ苗木も根を張って、大きく伸び上がってくる。」[4] と願いをひろげています。しかし、実際はそういう風にはいきませんでした。この庭は大学の中央、ひとの目の集まる場所に位置し、手入れが欠かせないという事情がありますし、また、図書館の増改築に際しては資材置き場として利用され、その結果荒れてしまった庭の修復に大きな労力を必要としたのです。そういうわけで毎年一回この時期に簡単ではありますが手入れを行うことにしています。

授業におけるこの場での作業は、庭の手入れではいたって基本的な事柄です。手前、道沿いに植わっている樹木のいたずらに飛び出た枝を取り去り、枯れ枝やかかり葉を振り落としたうえで、地面に積もった枯れ葉を取り除きます。それから、雑草や一年で顔を出したアラカシの芽を丁寧に抜き取ります。何のことはない、掃除です。実はこれだけのことで、庭の印象は大きく変わります。この庭の特徴は、伸び上がった木々の枝葉がつくる高さのある空間を下から見上げられるところにあります。我々が行う手入れは庭の下の方のみでの作業ですが、それだけでさまざまな枝葉に眼がとまるようになり、そこに夕方の木漏れ陽が差し込んで奥行きが感じられるようになり、この空間の美しさが感じられるようになるのは、驚きです。自分の体を使った作業の後、空間が変わるということを体感するのは、また格別な発見です。

もう一カ所、E 棟北側一帯の森でも手入れに取り組みます。この庭も 2002 年度 2003 年度に環境整備等委員会からの依頼をもとに「作庭実習」で整備を進めたものです。そこでの作庭の様子は、「作庭実習「森をつくる」3 庭の自然について（1)」「作庭実習「森をつくる」4 庭の自然について（2)」[5] で、詳しく述べています。参照願います。この庭は大学構内の周辺部にあるということもあって、はじめから山裾の雑木林の姿を念頭に造られています。従ってここでの手入れは、森全体を透かすような感じでノコギリも使って大胆に行います。受講生もこの頃には仕事に慣れて体が動くようになり、森の南西にひろがるアキニレの林を間引いたり森の中から不要になった樹木を切り出したりと、昔、里山で行われていたはずの作業に取り組みます。このあたりで、作業服と地下足袋は充分体に馴染んだものになっているはずです。

このように、「作庭実習」の藤森学舎での作業は、毎年繰り返されるべき内容を中心に組まれています。木々の年々の生長を待って手入れをし、調和を目指してきました。もうひとつの「作庭研究」という枠でも調和を目指して手入れをすることは同じですが、少し事情が違っています。教育研究改革･改善プロジェクト経費（学長裁量経費）に応募し、その採択を受けて毎年取り組んでいるプロジェクト「作庭研究－森をつくる」の一環として行う具体的手入れを「作庭研究」と呼んでいます。プロジュクト代表のわたしを中心に、作庭実習経験者の大学院生や卒業生に呼びかけてグループを組んで庭仕事に当たります。学内の各所で手当の必要な場所をリストアップし緊急度合いの高いものから順に作業を行っています。その中には、毎年の手入れである、事務

棟前の植え込みの剪定や、学生食堂横の庭の手入れも含まれますが、サクラ並木の枯れ枝の切除や繁茂しすぎた植え込みの整理、時には台風で倒れた樹木の撤去なども入り込んできます。先日の、マルバヤナギの大木がバランスを崩して倒れ始めたときなどはさすがに少人数の手仕事であるわれわれでは対応できず施設課を通じて業者に伐採を依頼しましたが、かなりのところまでは作庭研究で対処できます。近頃では、施設課からの依頼を受けて作業をする場合も増えています。こんな案配ですから、仕事が絶えることはありません。作庭実習とは違って一年を通じて、さまざまな場所で地下足袋姿を見せることになりました。

作庭研究での庭仕事の具体的な報告は、グループの主要なメンバー、和田香世さんにお願いしました。彼女は現在、大学院教育学研究科美術教育専修 2 年次に属し、植物をモチーフにした大きな油彩画と格闘しています。修士論文も大詰めにさしかかるなか、快く引き受けてくれました。和田さんの目からはこの作業はどう見えているのでしょうか。

学部 3 回生の後期、初めて「作庭実習」という授業を受けました。自然や風景に対してそれまでと違う視点を得られたこと、何より作業することがとても楽しかったことから、4 回生の後期にも授業に加わりました。大学院に入ってから授業以外の「作庭研究」にも参加できるようになり、今に至ります。作庭研究では一年を通して、緑の手入れを行います。樹木の剪定をしたり、通路に伸びてきた枝を短くしたり、建物との折り合いをつけたり、傷んだり枯れてしまった木の手入れをしたり、また植樹や石据えなども行いました。ここでは作庭研究の藤森学舎においての作業を振り返りたいと思います。

2013 年 12 月 25 日

この日は冬休みでしたが、岩村先生、卒業生の岡林さんとともに IPC の建物の北側で作業を行いました。B 棟と C 棟、IPC に囲まれた場所です。中央にある大きなマツの枝が低いところまで下がってきており、通行やお掃除に支障があるので手入れが必要とのことでした。実際に行ってみると、マツの枝と、道を挟んだネズミモチの枝とが大きく枝を伸ばして高い所で一体化しており、場所全体として暗い印象を受けましたので、マツと共にネズミモチにも手入れをすることになりました。マツの低い枝は人の顔より低いくらいのところまで下がってきていますが、低い枝

の元まで辿って切ってしまうと、バランスが極端に悪くなってしまいますから、様子を見ながら木と人にとって良い形を探ります。特に下がってきているところを取り除きつつ、その後どの枝を残してどの枝を切るのかを考えました。大きく減らしたので、切った直後はやはり少し不自然になりはしますが、マツの高いところの枯れ枝を落とすことで、何となくすっきりとしたのが不思議でした。

ネズミモチは IPC の建物の角に位置していて、とても元気なのですが、元気が良すぎて窮屈そうに見えました。岩村先生の指示を受けながら、大きく枝を減らしていきます。木自体は元気なので、さぞかし迷惑だろうと思いますが、枝が減ったことで木の形のきれいさや伸びやかさがより見えやすくなり、不思議と作業の前よりネズミモチの背が高くなったようにも感じられました。マツの枝が減ったこととも相まって、場所一帯もとても明るくなりました。作業の終盤、C 棟の傍のモクセイを、岩村先生がみるみるきれいに、自然な形に剪定していきます。隣のトウカエデにも少しだけ手を入れました。いつも私は言われるままにあっちの枝を切ったり、こっちに手入れをしたりするのですが、作業の積み重ねを経てその場所一帯につながりが出るというか、場所全体の呼吸がひとつのものとして整っていくように感じます。

2014 年 2 月 21 日

D 棟、音楽棟の螺旋階段の傍のコウゾの木が枯れているとのことで手入れに行きました。施設課からの相談があったそうです。枯れたり傷んでしまったりした樹木の手入れは重要な仕事です。枯れるともろくなってしまい、枝などが落ちてくることも起こり得ますから、なるべく早く取り払わないといけませんし、場合によっては枯れた場所を切ることによって木の寿命が永らえることもあります。その日は卒業生の深町さん、岡林さんも参加されていました。コウゾは根の部分が工事によって傷んでしまったのだろうとのことでした。3 本とも枯れているのかと思われましたが、階段よりの一本がいくらか枯れつつもまだ生きていました。それだけ残して、あとの 2 本は根元から切ることになりました。残った一本も、生きているところを残して枯れた部分は切りました。その道を挟んで向かい側、演奏室の傍にあるマユミの一本が立ち枯れているのを、お腹くらいの高さで切ります。近くのカシの木が重く見えたので、左右に伸びる枝をそれぞれ大きく減らしたりもしました。

この日は西門でも少し作業しています。電柱の支えに、カイヅカイブキの枝が引っかかって圧迫しているのを切り、その近くで枯れていたトベラも根本から切りました。少しと言ってもこれらもけっこう大きな枝でした。トベラはすっからかんに白く枯れていましたが、幹がすべすべとして、形も伸びやかでとてもきれいでした。

2014 年 2 月 28 日

正門から入って右手に、いくつか石を据えました。ガメラと呼ばれている建物の北の、少し坂になった広いところです。カシやクス、モミジなど、大きな木がならびます。石を据えたのは大きなカシの木の下の、すっぽりと影になるところでした。2014 年 1 月 23 日、作庭実習の授業のなかで、ここにひときわ大きな石を 2 つ据えています。この石は大学会館改修時の入り口のスロープ工事で不要になったもので、新たにこの場所に移されました。この時の作業には授業に関わ

っている男手が当たりましたから私はその場にいませんでした。2 月 28 日、今度は作庭研究でここに中くらいの石や小さな石を合わせて 4 つ据えています。この時は私もその場にいて、うち一つは石の場所や向きなどを任せてもらえました。結構大きな、四角いごつごつした石、素直ではなさそうな、しかし可愛げのある石です。とても嬉しいことでした。これは 1 月に据えた大きな石の傍に、関係性などに気配りしつつ、遠くから見たりしつつ据えました。私は油絵を描きますが、絵を描きながらキャンバスを眺めるように、配置だったり、ものとものとの関係だったりを考えなければなりませんから、何だか試されているような、きっとここが良いと思うけど、その感覚は人と共有できるものだろうか、といった少し不安な気持ちにもなりました。なりましたが、据わって見たその石は何となく落ち着いて見えて、これできっと良かったのだと思えたのでした。1 月に据えた大きな石と、カシの木、芝生の斜面、斜面に散らばる他の石などを見ながら、全部がきれいに見えるようにその他の石の配置も決めていきます。この日は卒業生の岡林さん、深町さんがいて、先生と深町さんが音楽棟周辺のグミやビワの剪定に行っているあいだ、最後の 2 つの石の行方を岡林さんと考えて据えました。石がそこに現れるというそれだけのことでも、風景や、樹木の形への認識が少なからず変化します。石の形や重量感、そこに出てくるリズムのようなものを見るようで、作業の後は飽きずに眺めました。

因みにこの日は D 棟前のヒラドツツジの剪定なども行っています。いつも切る枝に迷うのですが、「理由があったら迷わない」と先生に教えてもらい、そこから少しだけ楽に切ることができました。

2014 年 3 月 10 日

卒業生であり非常勤講師の山内さんが樹木の苗を 10 本ほど持ってこられたのを、学内に植樹しました。以下にその種類と、植えた場所、現在の状況などを記述したいと思います。

・オオシマザクラ（×3）　体育館の横の斜面

まだまだひ弱に見えますが、現在も元気そうにしています。

・ヤマザクラ（×3）　トレーニングセンターの西に 1 本、陶芸小屋の南に 2 本

陶芸小屋の 2 本は、根元に傷を受けて残念ながら枯れてしまいました。トレーニングセンターの西にぽつんと植えたほうのヤマザクラは今も元気そうにしています。

・ゴンズイ　E 棟前の森

夏には何度か萎れていましたが、水やりの効果あってか何とか元気にしています。

・コウバイ　正門の傍のカシの木の近く（石据えをした近くでもあります）

少し枯れかけているようにも見えますが、まだ私には判断がつきません。

・ニシキギ、オガタマ　この 2 本は保健センター前の斜面、階段の傍に植えています

2 本とも夏には弱っているようにも見えて不安でしたが、現在はどちらも元気そうに見えます。ニシキギの紅葉は名前の通り鮮やかで、斜面の緑の中でとてもきれいに見えました。

先生たちが穴を掘って植樹しているあいだ、その後を辿るように私と岡林さんで支柱を立てていきます。竹はグラウンドの横の竹林から切って来ました。後半、山内さんは事務棟前のサクラの枯枝を切る作業を行っていました。

苗は場所との相性次第で枯れてしまったり、傷がついても枯れてしまったりします。伸びやかに育つことを祈りつつ一喜一憂しています。この後 6 月にヤマザクラの根元の傷を発見した時、その時点ではヤマザクラは元気そうでしたから、私はそれが木にとってどんなことなのかわからないでいましたが、岩村先生がとても残念がっているのを見て、やっと事態をのみこみました。薄皮一枚に見えても実際は致命傷だったようです。

2014 年 3 月 14 日

事務棟建物側の手入れを行いました。この日私はお昼頃から作業に加わりましたが、その頃には先生が一人で図書館の西側、事務棟との間で作業をされており、すでにツバキや数種類のツツジなどがきれいになっていました。坂道沿いの石垣の上の場所です。それを少し手伝った後、事務棟の玄関の横にある庭の手入れをしました。建物と建物の間の空間を利用して作られた庭で、事務棟の内側にも面しています。それを 2 人で内側と外側から挟み込むように作業に当たりました。キンモクセイやマキ、カナメモチ、サザンカが 2 本、ツツジの仲間が数本ある場所で、先生が指示する枝を切っていきます。自分でも考えようとはするのですが、見ようとするほど部分ばかりに目が行き、難しさを感じます。けれど枝がなくなった瞬間ごとに木の形や周囲との関係がすっきりときれいになっていくのは面白いものです。作業とともにそれぞれの枝の密度が下がり、風通しや日当たりがよくなってとても気持ちのいい空間になりました。枝の向こうに奥の空間が垣間見えるようになったことで、印象が柔らかくなったように感じます。

2014 年 3 月 17 日

食堂から見えるオカメザサの一群やその周辺には毎年手を入れています。私はあまり食堂を利用しませんが、時々食堂に行くとやはり窓の外はきれいな方が気持ちいいように思います。この日は作業者がたくさんいて、岩村先生の他、卒業生の深町さん、院生の姜さん、科目等履修生の西園さん、私の 5 人で作業に当たりました。オカメザサを囲むように並ぶヒイラギモクセイの手入れから始めます。まず揺さぶって枯れた枝や葉を落とし、枯れた部分を切ります。中には 1 本丸ごと枯れているものもあり、そういったものは根元から切ります。その後絡まった枝や、伸びすぎた枝などを剪定していきました。ヒイラギモクセイは大量に枝を出しては四方八方に伸びていて、永遠に構っていられそうにも思えましたが、大きく枝を切ってあとはほっといても良いのだと先生に教わりました。2 時間ほどそのように過ごして、オカメザサの作業に移ります。オカ

メザサの作業は割と単純なものです。高さを揃えて切っていくのです。端から少しずつ高さが増すように、一つの塊であるかのように揃えていきます。面を揃えていくので、デッサンと似ていると感じました。葉の出ている上の、なるべく目立たない場所で切るようにします。単純であるほど、何だか無心に作業に没頭してしまい、ずっとこれをしていたいと思えるほどでした。作業が進むにつれて奥へと入り込んでいくため、オカメザサの中に自然とけもの道のようなものが現れていて面白く思いました。オカメザサが大体終わると、皆で掃除をします。落ち葉を取って、仲間外れの（一群からはぐれた）オカメザサを切り、草を引いていきます。掃除によって驚くほど場所の印象は変わります。掃除も大事な作業なのだとこの日改めて思ったのでした。この日は事務棟前のサツキの剪定なども行いました。

2014 年 3 月 24 日

再び、事務棟の正面の手入れを行いました。先生と西園さんとの 3 人で作業に当たっています。ヒラドツツジからサクラにかけて絡み付く蔓植物（ヤブガラシやヘクソカズラなど）を取り除くことから始めました。ヒラドツツジなどがある方とは逆側から潜り込んで蔓を取り除いていくのですが、狭いところに入っていくことは面白く、相手が植物とあってなおさらとても楽しかったです。その間、西園さんが両手鋏を使い、白くなっている草を刈っていました。その後のヒラドツツジの剪定では、輪郭線を出すように飛び出たところを切り取っていきます。先生から見て、剪定しやすいものを任せてもらえたので、とてもやりやすく感じました。どの枝を切ってどの枝を残せば木がきれいになるのかが分かりやすい木でしたから、まるで自分が上手になったような気がして、とてもいい気持ちでした。中で絡み合って枯れている枝を取り除くのがとても楽しく感じました。お昼御飯を挟んで取り掛かった別のヒラドツツジは、午前に作業したものより枝が多くて少し難しく感じました。仕上がりも少し垢抜けない印象で、あと何手か足りなかったかもしれません。西園さんはひこばえを切ったり、ヒラドツツジの傍に立つウバメガシの剪定をしたりしていました。その場所がすっきりすることで、ヒラドツツジを含めたその一角がきれいになったように思いました。ヒラドツツジがきれいになることとともに、足元の雑草や蔓がなくなったことで印象がとても穏やかになりました。

2014 年 4 月 28 日

トレーニングセンターの前に、大きなフウやトウカエデがあります。ヤマザクラを植えた場所よりは若干南にあたります。フウは途中でぶつ切りになっていた枝を根元から切るとともに、枯れ枝なども取り除いておきます。このぶつ切りの枝は目立っていたので、2 月頃から先生は切りたがっておられましたが、高いところから大きな枝が落ちる作業ですから、自動車が停まっていたりすると遠慮しなければならないので着手できずにいました。この日は危ないところに自動車がなかったのでチャンスだったのでしょう。元気よく作業に臨んだのでした。フウの隣のトウカエデそれ自体も大きいのですが、巨大なフジに絡まれており、どこまでトウカエデでどこからフジなのか目を凝らさないとわかりません。どちらも元気そうです。影になって枯れているところだけ取り払いました。それだけの作業も相手が大きく、トウカエデを切るとそれに絡んだフジまでついてくるのでとても大変だったように思いますが、大きな広い場所で、木陰で作業するのは

いい気持ちでした。その一帯は大学のなかでも端にあたる部分で、建物が少なく空も広く、植物の勢いも強いように感じます。そしてその勢いを許容する広さがあります。それは貴重なものだろうと思います。

この日はその後、演奏室前のシダレザクラの枯れ枝を切り落とす作業を行いました。花の時期ですから、枯れている枝を見分けやすく、脚立に登って花をつけていない枝を切り落としていきます。木によっては大きめの枝も枯れていました。枯れ枝を切除しておくことで、来年もっと枯れるのを防ぐ効果があるそうです。

幼いころから空き地が好きでした。人の手を離れた雑草の領域を見ると、もの悲しさを感じると同時に、すっと気持ちが落ち着きます。ですから作庭実習に加わったほんの始めのころは、気持ちのどこかで距離を置いて作業を捉えていました。自然に対して、手を入れないのが本当は一番いいのだと思っていたのです。今でもそう思っているのですが、けれどもどうやら自分が思っていたよりも、自然は生易しいものではないのだとだんだん気付くようになりました。当たり前のことですが自然は生きていますし、生長します。特に樹木は光を求めた熾烈な競争を繰り広げ、人の手が届かぬほど大きくなりますし、それに伴い太く重たくなります。私などよりシビアな世界に彼らは生きているのです。共存するには、その都度手入れが必要になります。自然を甘く見てはならないということを作庭の中で学びました。手入れが必要ならば、きれいな方が良いのです。「きれい」「きれいじゃない」という物差しは勝手なもので、その場の判断で樹木を大事にしたり、根元から切ったりします。けれども人と自然の境界にあって、鋸や鋏を使って自然に対して作業をするからには、人の側ではなくその間の視点を持つように努めるべきだと、私個人としては思います。

2014 年 4 月 30 日

C 棟の前の広場のようなところに池があります。この日は C 棟側の池のほとりに位置するイボタノキの手入れを行いました。2 本並んだイボタノキのうち、左側の幹が大きく裂けていて、何とかしてみようとのことでした。その裂けていた方はもうどうしようもないと判断されて、根元から切ったのですが、残った方を何とかきれいにしようと先生が格闘されていました。切りつつ切りつつあちこちから様子を見ながら仕上げます。イボタノキは枝ぶりも葉も柔らかい印象を受ける木で、実際柔らかく折れやすいようです。自分の重みで裂けてしまうという間抜けさも相まって、とてもかわいく思えて私は好きでした。そのあと池の奥から掲示板の裏にかけて、ネズミモチ、ザクロの枝を切りつつ手入れをしました。本来なら人も通れるところを塞いでいた枝がなくなったので、作業とともに池の奥に道が現れて見違えるようでした。C 棟側から見えるところは特に丁寧に剪定をします。切るごとに光が入り、きれいになりました。私はその場所にザクロがあることを知りませんでしたが、枝の伸び方に勢いがあり、妙な風格を感じました。掲示板の裏にある大きな天井のようなウバメガシも、脚立にのぼって先生の指示するところを切っていきます。小道を挟んで反対側にあるマサキが道にせり出しているのを先生がちゃっちゃと切っていました。きれいな緑色の葉に何かの幼虫が大量についていて、春を感じたものでした。

私は物覚えが良い方ではありませんが、作業を通して樹木の名前を覚えたり、道を歩きながら

作庭で覚えた木を見つけたりするのは面白く感じます。それぞれの堅さ、柔らかさ、匂いなどを認識しながら、作業の中でそれぞれへの思い出を少しずつ増やします。

2014 年 5 月 19 日

図書館の建物の西側に入っている樹木はいずれも、建物が改装された後に業者さんが入れたものですが、5 月初旬に入れられたらしいヤマボウシが来て早々に枯れかけていました。早急に手入れをしなければと、この日はその周辺で作業をしています。ヤマボウシは外から運び込まれてきたのですから、根が弱っていたのかもしれません。また岩村先生が言うには、ヤマボウシは移植の難しい木で、特に新芽が出てきたばかりのこの時期は難しいのだそうです。ハイポネクス（栄養）などを混ぜた水をたっぷりやり、先生が枝を減らしている傍で私は草引きなどをしていました。樹木の身体の仕組みに私は詳しくありませんが、根が弱っているときにはそれに合わせて身体を小さくしてやることが必要なのだそうです。その後も晴れた日などは水やりをするなどしていたのですが、残念ながら現在このヤマボウシは枯れてしまっています。この日はその後建物の北の方まで草引きをしました。地味な作業にも思えますが、空間がどんどんきれいになりますし、何よりも楽しい作業です。セイタカアワダチソウ、ノゲシ、オニタビラコ、カタバミ、ドクダミ、などなど、さほど広くない範囲に色んな植物が生えていました。カタバミのピンク色の花がきれいでした。

2014 年 6 月 16 日

先生と岡林さんと共に、C 棟前の藤棚の周辺で作業をしました。これは学校の西側の工事とともにそこから引っ越してきたフジで、当初は丸太のような姿でしたが、2 本あるどちらもが元気に芽を出し、蔓を伸ばしています。この日はフジの上方に被さるように育っている木の枝を取り払ったり、場合によっては木の根元から切ったりもしました。このままフジが育てばそれらの木の枝にフジが絡んでしまうからだそうです。手を入れたのはネズミモチやウラジログミ、アカメガシワ、シャリンバイ、ゲッケイジュ、エノキ、イボタノキなどで、けっこうな密集地帯であったため、切るに当たってもあまり遠慮が芽生えませんでした。作業の後すっきりとした風景を見てすがすがしい気持ちでした。1 本棚から離れた場所にあるフジが、どこに絡み付こうか思案気味にしているので、岡林さんが棚とフジとをシュロ縄で繋ぐ作業をしていました。フジに釘を打ち、そこと棚の 3 箇所とにシュロ縄を張ることで、棚に辿りついて元気に花を咲かせてくれるのではとのことでした。そのフジはそれからシュロ縄を辿り辿りしていたようなのですが、この秋の台風で折れてしまっていて、どのような手入れをすべきなのか現在思案中であります。

2014 年 6 月 30 日

先生と岡林さん、私の 3 人で A 棟の南、サクラの木の下へ向かいました。その日は坂東先生がサクラの枯れ枝を切る作業をすでにかなり済ませていて、我々はそれに加わります。枯れている枝、建物にぶつかりに行っている枝を切り、右隣のシュロの枯れた枝なども取り払っていきました。シュロの葉は、細長く伸びた茎のなるべく根元を剪定鋏で切るのですが、独特の手応えがあります。堅くて分厚い茎なので、握力を要しますが、ある程度以上力を入れると手応えとともに

すんなりと切れますので、妙な満足感が残ります。シュロの枯れた花なども取り払っておきました。またその足元のネズミモチやイボタノキたちを先生が元から切っていました。

それらがひと段落して坂東先生とはお別れしつつ、その日は午後から 3 人ばらばらで作業を続けました。岡林さんは事務棟南側のヒラドツツジとトベラの剪定、私は事務棟西のヒラドツツジやサツキに絡まるヘクソカズラなどの蔓を取り除いてから、岡林さんの行っている作業に加わります。岩村先生は A 棟の向かいの坂道で枯れていたりする木々（エノキ、サクラ、クスの大きな掛枝、カナメモチ、イボタノキなど）を適宜とっていくという作業でした。

2014 年 7 月 21 日

学生会館の裏、池のほとりにクワの木があります。以前、その一帯の工事に伴い、低いところで切り株にされていましたが、切り株にされた断面から無数の枝を伸ばし、お化けのように丸く大きくなっていました。巨大なまん丸の緑の塊が、池に倒れこまんばかりに見えてさすがに不細工だったのか、施設課から岩村先生に相談があったそうで、このクワの周辺で作業を行いました。暑い時期に、このお化けのようなクワの木の枝を減らしていく作業は大変でしたが、切られたことに対する逆襲のように爆発的に成長した姿を見て、圧倒されると同時に愉快な気持ちでした。真横に向いている枝を減らしていくとみるみるうちにすっきりして、きれいな木の形が出てきます。最後の方はバランスを見ながら、もう少し育ったら手前の方の枝も減らせるのではなどとも言いながらひとまず仕上げました。枝が減ったことで、今後は残った枝に上手に栄養が行くのでは、とのことでした。あとはクワの右隣のクスの木や、池の左手にある小屋に被さるように育ったムクやネズミモチをいくつか切りました。また、学生会館の建物の角のモクセイが一部折れていたので、その部分まで木登りして取り払いました。木登りをすると、少し気持ちが高揚します。学生会館のすぐ隣には保健管理センターがあり、そのモクセイを含めたセンター前の一帯にも、2013 年 9 月 17 日に手入れをしています。その時には大きなモクセイが並んでいるのと、モミジ、モチなどを剪定しました。

2014 年 7 月 28 日

IPC の建物の南側の手入れ。これは施設課からの相談に応じての作業でした。室外機の傍に並ぶシャリンバイの一体が総じて枯れているのを根元から切っていきます。室外機からの風がきっと嫌だったのでしょう。シャリンバイの枯れ方はすさまじく、切らずとも力を入れたら抜けるものもありました。シャリンバイとともにナンテンなども切りました。枯れたシャリンバイの足元のひこばえなども取り払い、なるべくすっきりとさせたのですが、一本育ちざかりに見える小さなシャリンバイだけ残しました。岩村先生は C 棟側にある大きなニレとトウカエデが絡み合っているのを剪定します。シャリンバイに熱中し過ぎてそちらに全く注意を向けていませんでしたが、ふと正気に戻ると背後にたくさん先生の切った枝が横たわっていて驚きました。そんなに枝がなくなったと思えないほど、ニレ、トウカエデ双方は自然な形で機嫌よく見えて、何となく納得したのでした。

この日はライガーを借りに行ったついでに A 棟の北側、切り株になったマルバヤナギの近くに行き、アオキの枯れかけた枝を切りました。この場所のマルバヤナギは巨大に育っていましたが、

枯れて傾いてしまい危ないので、業者さんに切ってもらったのだそうです。去年このマルバヤナギの枝を水につけ、根を出したものをこの近くに植樹することを試みましたが、残念ながら根付きませんでした。

関係ないのですが、ライガーとは作業に使う荷台のついた青い車で、いつも切った枝や草などをその荷台にのせて運びます。「ライガーを借りに行ったついでに」作業することは結構多く、ライガーで走りがてら枯れた枝を見つけて引き落としたり拾ったり、ということがよくあります。もしくはちょっとした作業を要しそうなところを見つけておいてそこに寄り道したりもします。ライガーはさほどスピードのでない車で、屋根もありませんから、走るライガーから学内の風景を見るのはとても気持ちがよいと感じます。

2014 年 8 月 12 日

通り過ぎた台風の爪痕をほぐす作業でした。グラウンドの南東のカーブ沿いで、マサキが折れてしまっているのを切りなおし、その周囲を剪定したりしました。マサキの他、ハリエンジュ、チャンチンモドキ、少しだけカイノキにも手入れをしました。この付近はあまり手入れの入りにくいところでもあり、樹木が入り組んでいます。その中に入り込むのは楽しく思いました。また学生会館に続く道のひこばえなどを取り払いました。

これを書いている今は、紅葉や落葉が進む時期に当たります。自分が作業しているという思い入れや贔屓目ももちろんありますが、教育大の秋は本当に美しいと感じます。西門の駐輪場に自転車を停めて、エノキなどの落ち葉を踏みしめて歩きますと、身体の中から秋の記憶が戻ってくるようで、懐かしい心地になります。

今回の文章を書くにあたり、当時のメモなどがたいへん参考になりました。半ば忘れていたことなども、自分のメモを見ていると不思議と鮮明に思い出すのでした。作業の内容とともに落ち葉の色や匂いや風の温度、作業を取り巻く音なども自然と浮かんでくるようです。作庭の作業をしていると、自然の中に入り込んで自分の中に良いものを蓄積しているような感覚があります。文字を辿りながらそれらが戻ってくるようで、これを書くのも作庭同様、楽しい時間でした。

岩村に戻ります。ここで、この大学全域の木や草に関する将来構想とも言うべき植栽計画の現状について簡単に触れておきます。

平成 22（2010）年、当時の環境 WG において、大学全体の樹木の将来についてのガイドライン策定に向けた議論が始まっています。それまで必要に応じ場当たり的に行ってきた樹木管理を、ひとつの指針に基づいて行うようにしたいというものでした。同時に、この植生に関わってこられたさまざまな立場に、策定に向けた意見がもとめられています。平成 23 年 3 月発行の環境教育研究年報第 19 号に特集「京都教育大学植栽計画策定にむけて」[6)] が組まれ、寄せられた意見・提言 9 編が掲載されています。寄稿者それぞれの立ち位置が反映された貴重なものでありました。それらを集約しまとめたものが環境 WG に提出され、後を受けた財務施設専門委員会において平成 24 年度に「今後の方針」として決定されています。それには、この大学の植栽は、「大学構内に生育する多様な植物は混在する植物群落を形成し、教育･研究の対象として利用されるのみならず、学生･教職員の諸活動の背景として大学環境の中核となる重要なものである。」と位置付けられています。

この間、大学は、平成 18 年度から数年にわたった耐震改修、平成 23 年度からの大学会館改修、附属図書館増改築、平成 24 年度のライフライン更新を行いました。相次いだこれらの大規模工事によって藤森学舎の緑は大きなダメージを受けています。極めつけは、平成 25 年度の敷地境界塀の改築でした。これによって周辺部にあって大学を大きく取り囲んでいた木々は、工事にとって邪魔なものとして伐採撤去されてしまいました。そのなかにはひと抱え以上に成長した樹木も多数含まれていました。残念ながら、もはや「緑豊かなキャンパス」というのはイメージでしかありません。これらの工事は大学の将来に向けた機能更新であり、重要な取組であったことはいうまでもありません。だから仕方のないことだったのですが、通常その後の植栽の回復については工事計画には含まれないものです。早急に対策が必要だと考えます。大学を挙げた取組が不可欠です。なんとか、これまでの多くのひとの思いがつながってわれわれが受け継ぐことになった希有な財産を、次のひとたちに渡さなければなりません。そのためにも「京都教育大学植栽計画」が必要です。財務施設専門委員会でも平成 26 年度中の策定を目指し、欠けた部分への苗の導入も含めた具体的な計画案の検討に入ったところです。

さて、庭と森の話をもう少し続けたいと思います。先日、或る本を読んでいて、興味深い文章に行き当たりました。

> 詩人は、作品の圧力のもとにあって、自然的現実を消失させるのと同じ運動によって姿を消してしまう。もっと正確に言えばこうである。つまり、事物が散り散りとなり、詩人が消え去ると言うだけでは充分ではない。さらにまた、事物も詩人も、真の破壊作用によって中断をこうむりながら、この消失そのもののなかで、この消失の生成のなかで― 一方はふるえ動きながらの消失であり、他方は語りながらの消失だ―おのれを確立すると言わなければならぬ。自然は、言葉によって、それを絶えることなく無際限に消失させるリズミックな運動のなかに置きかえられる。そして、詩人は、彼が詩的に語るという事実によって、この言葉のなかに姿を消

し、唯一の先導者にして原理でありつまりは源泉であるこの言葉のなかで成就される消失そのものとなる。（略）つまり詩的に語る者は、真の言葉のなかで不可避的に活動しているこの一種の死に身をさらすのである。[7)]

これは、フランスの小説家モーリス・ブランショがその主著と言える評論のなかで展開する、詩人マラルメに関する論の重要な部分です。来るべき書物について模索する言語や文学に関する文章群であると考えられるのですが、広く芸術の言語に関わるものとして、わたしは絵画と自分を背景にして読んでいます。わたしがモノにふれることで絵画は生まれてくるのですが、常にそれらはひとつのモノとして自分からは遠いところに降り立つように思われます。作者という自分はもう不要なのではあるまいか、常々そう思い始めていたわたしは同意を持って読み進めました。

書物は、作者なしに存在する。なぜなら、それは、作者が語りながら消え失せてのち初めて書かれるからである。書物は、作者が不在であり不在の場である限りにおいて、作家を必要とする。書物は、それを読む人間の固有の感覚から自由であると同様、それを書いたと覚しい誰かの名前にけがされておらずその存在から自由であって、そういう誰かに帰するものでない場合に、書物なのである。[8)]

無名性を表明した心地よい断言です。画家の意図や思いのようなものは見るという行為にとってはじゃまなものでしかない。絵画のみならず美術作品は、路傍にある何らかのモノや出来事として見られ、断片としてさらされたときにはじめて見る者との間に関係が出来、美が作動する可能性も生まれてくるのではないでしょうか。

少々いい気になっていたとき、「森」がわたしの内に不意にあらわれました。この引用文の「書物」を「森」に入れ替えるとどうでしょう。「森は、作者なしに存在する」。「庭」は庭師や作庭家、場合によっては施主を作者として持ちます。その意味で、庭は作品であると言えます。となると、今述べた美術と自分についての考えは、まだまだ徹底されてなく、言葉のみであったように思われてきます。この報告のなかでもわたしは作庭家として振る舞ってきましたし、冒頭の広報のなかの微妙な言い回しもそれだからこそ生まれたものでしょう。しかし同時に、わたしは、作庭実習や作庭研究の目的を、矛盾した言い方ではありますが「森をつくる」と言ってきました。また、大学にふさわしい木々の将来像を夢想し、「自然の下で、木が持つようになる本来の樹形を生かした、明るい森。大学の多様性を持つ思索のうえに、大きく腕をひろげる森。」[9)]と記してあります。そのうえで、社会を律しているように思える合理性とは少し距離を置いた思考を、この森のうえに展開していかなくてはなりません。わたしが使うここでの「森」という言葉はいったい何なのでしょう。このなるようになってきた森―空間を、わたしの狭い作為や思惑がゆがめてしまうとしたら、自分にとってもかなり気持ちの悪いことになってしまいます…。わたしのなかにいつの間にか亀裂のようなものが出来、ズレが生じているようです。このままでは前に進めません。わたしの意識を更新し、もっとゆるやかでスケールのあるものにしなければなりません。そう、考えはじめました。もうひとつ文章を引用して、バラバラなまま、この報告を閉じようと思います。

世界はもう私たちにはほとんど何も与えてくれません。世界はもう喧噪と不安とから成り立っているとしか思えないことがよくあります。けれど、草や樹木は変わりなく成長しています。そしていつの日か地上が完全にコンクリートの箱でおおいつくされるようなことになっても、雲のたわむれは依然としてあり続けるでしょうし、人間は芸術の助けをかりてそこかしこに、神々しいものへ通じるひとつの扉をあけておくでしょう。[10)]

註

１）「京都教育大学の樹木について」KYOKYO 京都教育大学広報 第 129 号 2012 年 3 月 p.14
２）「作庭実習「森をつくる」10 環境共生園について（4)」 京都教育大学環境教育研究年報 第 18 号 平成 22 年(2010) 3 月 pp.35-48
３）「作庭実習「森をつくる」2 庭と時間」 京都教育大学環境教育研究年報 第 11 号 平成 15 年(2003)3 月 pp.47-60
４）同上 p.59
５）「作庭実習「森をつくる」3 庭の自然について（1)」 京都教育大学環境教育研究年報 第 12 号 平成 16 年(2004) 3 月 pp.55-67
「作庭実習「森をつくる」4 庭の自然について（2)」 京都教育大学環境教育研究年報 第 13 号 平成 17 年(2005) 3 月 pp.61-76
６）特集「京都教育大学植栽計画策定にむけて」京都教育大学環境教育研究年報 第 19 号 平成 23 年(2011)3 月 pp.141-164
７）「来るべき書物」『来るべき書物』 モーリス・ブランショ 粟津則雄訳 1989 筑摩書房 p.326
８）同上 p.327
９）「作庭実習「森をつくる」10 環境共生園について（4)」 京都教育大学環境教育研究年報 第 18 号 平成 22 年(2010) 3 月 p.47
10)「庭についての手紙（1949 年 1 月 クルト・ヴィートヴァルト宛)」『庭仕事の愉しみ』 ヘルマン・ヘッセ V・ミヒェルス編 岡田朝雄訳 1996 草思社 p.202